

本学教室員執筆書籍の紹介

鈴木昭広編集 メジカルビュー 「こんなに役立つ！肺エコー」

鈴木 昭 広

私が肺の超音波に興味を持ったのは、麻酔科から救急部に異動し、ドクターヘリ活動に従事し始めた頃であった。麻酔科医風情がなぜ救急やドクターヘリなどを行う必要があるのか？麻酔科医は手術室でおとなしく麻酔をしていればいいのでは？と思われる方も多いかもしれない。しかし、実は麻酔科医は日々手術麻酔を介して、5分で気道呼吸循環中枢神経系に異常をきたす患者を人為的に作り出し、対応する、いわば蘇生学のエキスパートでもある。救急生活5年間を経ても、意識レベルJCS = 0の患者が5分後に300になるような激変には遭遇したことはないが、手術室では毎日何例もの手術患者がそういう状況になっており、その貴重な体験を積める麻酔の場は、筆者にとって手術室の外の世界を見て初めて自覚できたことであった。

さて、地域での対応を余儀なくされる外傷患者の初期治療に関しては、近年、外傷初期診療ガイドラインが策定され、国家試験にも出題されるようになり、医師のみならず医学生にとっても常識となりつつある。外傷対応においては、まず見た目の怪我だけではなく生理学的な異常に注目し、蘇生的介入を行うことになる。ABCDの対応スキルを備えている麻酔科医が、超音波による診断手法を併せ持つことで麻酔科医は手術室だけではなく、医療のあらゆるフェイズで役に立てるジェネラリストに変貌できる。そこで、筆者は全国

の麻酔・救急・集中治療医に呼びかけてABCD sonographyという教育団体を立ち上げ、急性期診療に役立つ様々な超音波手法の啓蒙にあたっている。中でも近年のホットトピックがこの肺エコーであり、出版社から企画を持ちかけられ仲間内で執筆して書籍化したのが本書となる。

実は、肺エコーの書籍はこれが本邦初ではないかと勝手に考えていたのだが、学会で講演活動を行っているうち、実はその歴史は古く、1950年代にAモードで日本人が最初に考案し、その後1960年台後半、筆者が生まれたころにBモードを札幌医大の名取名誉教授らが取組まれ、今の世界的なブームは第3次であることを名取名誉教授ご本人からお伺いすることになった。呼吸器超音波学として発展した肺超音波は、急性期診療ではあまりなじみがなかったため、検索に漏れて外国文献ばかりがヒットしていたのだが、日本人の先見性に驚かされ、また先達と巡り合う機会を得てうれしい限りである。本書はアマゾンのベストセラーで第1位を獲得し、すでに第3版を刊行するに至っている。こと急性期診療では新たなエビデンスが確立され、温故知新で学びなおすべきことが多い。気胸、肺水腫、片肺挿管、呼吸器からのウイニングなど応用は幅広く、先人の偉業を合わせて世に知らしめる一助となれば、と考えている。